

# 吉俣耕二 ・ E=

at イカロスの森 act call 20:00

2017年  
 5月10日(水) 昔々、ひとりの音楽家がいた  
 6月14日(水) この恋のこと  
 7月12日(水) 保存  
 with 木村佐和子  
 8月5日(土) 夏の花'17  
 8月6日(日) 夏の花'17  
 10月11日(水) LOVE 胡椒  
 with ヒラタユウイチ  
 & ナカノサヤカ

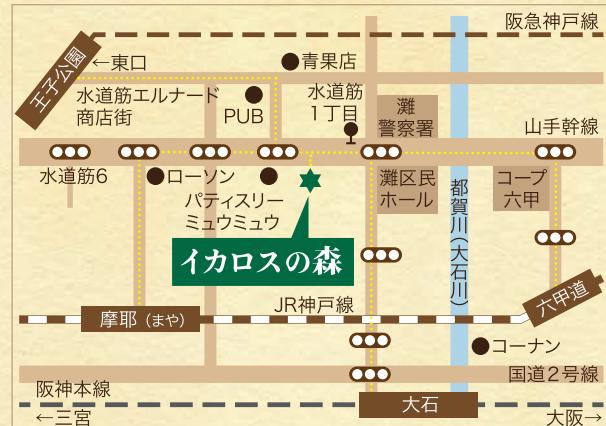
11月8日(水) 昔々、キミノ  
 with ミナトノヨコ  
 12月13日(水) 君は海を見たか?  
  
 2018年  
 1月10日(水) i  
 2月14日(水) アポジーとペリジー  
 3月14日(水) 月と六ペンス  
 4月11日(水) 森々と  
 with Aya Nishimura

## 吉俣耕二・E=

act call 20:00

at イカロスの森

〒657-0832 神戸市灘区岸地通1-8-10  
 url: <http://www.ikarosu.com>



### schedule

2017年	11月8日(水) コンヤ、キミノ with ミナトノヨコ
5月10日(水)	昔々、ひとりの音楽家がいた
6月14日(水)	この恋のこと
7月12日(水)	保存 with 木村佐和子
8月5日(土)	夏の花'17
8月6日(日)	夏の花'17
10月11日(水)	LOVE 胡椒 with ヒラタユウイチ & ナカノサヤカ
2018年	11月8日(水) コンヤ、キミノ with ミナトノヨコ
6月14日(水)	この恋のこと
7月12日(水)	保存
8月5日(土)	夏の花'17
8月6日(日)	夏の花'17
10月11日(水)	LOVE 胡椒 with ヒラタユウイチ & ナカノサヤカ
11月8日(水)	君は海を見たか?
12月13日(水)	月と六ペンス
2019年	4月11日(水) 森々と with Aya Nishimura

お問い合わせ

MUSIC STUDIO 海猫山猫  
 mail: uminekoyamaneko@outlook.com  
 tel: 078-321-0736  
 url: <http://umiyamaneko.thebase.in>  
 facebook: <https://www.facebook.com/koji.yoshimata>



父と母へ

領事は胸を突かれた。自分の馬にまたがり、歌いながら、おそらくは愛する者のもとへ、世界中の素朴さと平和のまつただなかへ駆け去ることができたなら。人生が人間にあたえているのはまさにそういうものではないか？もちろん違う。それでも一瞬の間だけ、そんなふうに思えた。

『火山の下』 マルカム・ラウリー

斎藤兆史 監訳  
渡辺暁・山崎暁子 共訳

厚焼き卵な夜でした。

ぴょろりんと、どこか遠い所で星が破裂したような気がしましたが、それはどうも勘違いのようで、つまりタンパク質であるわた街は黄色い靄でつつまれていたのだ。

二・三日前からひどい耳鳴りに悩まされており、それが上腕三頭筋を通つて脳まで達していたものですから星が破裂したと勘違いしても仕方がないのですが、その夜の耳鳴りはまるであなたの広背筋でした。僕は竜舌蘭酒を飲み過ぎて、なので、若干、足元がふらついていたのですが、無事に足は自転車置き場にたどり着いたようで、いつものように自転車をそこにちりりんと停めたのです。

ロゼットというのは不思議なもので、神の啓示のように自分の好きな方向に伸びて行くのでしょうか、年がら年中生えておるのです。思い出のケヤキですら、萌えては朽ち、朽ちは枯れ、雷に打たれ、裂け、近所で働く外資系企業の女子正社員に携帯写真を撮られるというのに、こちらはずつと小さな風をはらんでいるのです。「たんぽぽ駐輪場」

三日ほど前に食べた手羽先の唐揚げの食べカスが右上第二臼歯に挟まっています。

「エクスキューズミー、そこの方……」

しかし今度は、はつきりと聞こえたのです。まるで百年前から知っていたような、きりりとした澄んだ声で届いたものですから、これは無視をする訳にはいかなくて、労働で疲れてはいたのですが、仕方なく半袖の少年に変身をして（虫かごはマストアイテム）、二百年前から届いたような

声で返事をしたのです。

「僕ですか？」

「ええ、もちろん、あなたです」

見ると、年中緑をたたえ、風を受け取り、排気ガスを洗浄、廃棄物を分解している、かのロゼットが僕に話しかけています。

「最近のあなたの様子がどうも気になつていています。疲れているのではないですか？」

「え、そうですか？ ピカピカの十円玉のように輝いているつもりですが、そんなにくすんで見えますか……」

「ええ、今のあなたは、四十年のおっさんの肝臓色をしていますよ。全身ね。この恋のことを語ることはできないほどの零落ぶりです」

「そうですかあ……」僕は、鳥取砂丘でラクダが一口噛んだラッキョを思い起こしていました。そんな風に見えていたかあ――

「実は、今、あの時給千三百円で働いています。いえ、最近ですよ。もうちょっとね……えとあの、何処のどなたか知りませんが、自分の役割を果たさないというのかな、な

のいつもの場所、かがんで前輪をチエーンでとめた僕は、さ

て、狭いながらも楽しい我が家、月がとつても蒼いから、遠回りして帰ろうと思っておりましたら、ちょうど夕陽が海に落ちるときの「ちやばん」というような音、あるいは「ぼちゃん」というような声を聞いたのです。

「エクスキューズミー」

珊瑚を含んだ極上の沖縄グラスに竜舌蘭酒を注いだとき、みりりと聞こえるような、美しいソープラノだったのです。

のどこか遠い所、石油をいっぱい積んだ大型フェリーが転覆をして、血のような夕焼けのようなものを海に広げ、しかしそれをアンダーコントロールしていると発表しているような気がしましたが、どうもそれは幻覚だったようです。

どこか遠い所、石油をいっぱい積んだ大型フェリーが転覆をして、血のような夕焼けのようなものを海に広げ、しかしそれをアンダーコントロールしていると発表しているよう

」にあるのはオリーブオイルのような靄だけ。

「大変な仕事でしようね、でも悪くはないのでは——」

「とんでもない」僕は、サンチョ・パンサを思い出していました。

「それはそれは過酷な労働です……暑い日も寒い日も……

つまり季節などなく、僕には四季などないようです。芸術史からみた歴史に対する冒流です——しかし、それは常に進行し、コンパスの化け物のような器具が頭の上にあるような気持ちのする、それは恐ろしい作業なのです。道行く人は、僕を好奇の目で見ます。まるで奇怪な、地球がオレンジであるということを発見したホセ・アルカディオ・ブエンディアのようなことをしているのではないかといふ目で見るので!! しかし、それは実際に大手ファーストレストラン（ほら、その角を曲がった所にある）のワカサギ定食に使われておるので——実際に、そこで群れなす若者達は、我がワカサギを食べておのです——それは、かまぼこのようであり位相幾何学のようであり海老の唐揚げにもよく似ておりながらも虚数の保存に酔つてなりつている宇宙の誕生を指し示す循環論法のようでありつもつまり弁証法的論証をするならば……（以下、あまりに激昂し早口になりすぎたため、聞き取り不可）

ロゼットの目は、ひどく悲しそうでした。だし巻き玉子がその目にかかるて、うつとおしく、ひどく氣にしているようでもありました。ちょうどその時、駆前のゴミ箱のほとりを、サッカーボールほどもあるネズミが走っていたのだ。僕は、それを知っていたが、誰にも言わなかつた。

「つまりそれは、永遠の六ペソスなのですか？」

ロゼットはオーラルセックスのように誠実に（苦々しく）答えました。

「もちろんです、この高度に発達した資本主義社会では、ロゼットをするのも、ロゼットともロゼット♪とりながら風を感じるのも大変なのですよ……誰も知らない。誰も全くいない。あなたは知つていましたか？ ……よく、知つていますか？ 交通費込みですよ」

たまに風呂に入つたほうがよいラスコーリニコフ。

古今東西、他称自称、神話時代からコンテンポラリーまで、すべての詩人の沈黙が世界を包みました。靄が、トウモロコシの粒のように入り込んで耳から出て行きます。その器官はつながつていたんだ……それは気づく余地もない——

兄弟ではないでしょうか？ サイゼリアの従業員に感じると同じ、ひどく親しい感じ？ 夜のほかに何もない、竜舌蘭酒のほかに何もない……すると、森々と広がる、どこか遠い所からワカサギの唄が聞こえて来たのです。

「ダイオウイカと太平洋の暗いくらい CRY、たまらなく何処までも果てしなく轟くほど、想像を絶して息苦しい……息苦しい……が息苦しくはない、狭くて広い、暗くて明るく、大きくて小さい、くらい CRY、おまけに森で海で、僕であった。そんな想いを、空駆けるピーター・パンのように、リリパット王国のガリバーのように感じている人たちを感じたのは、これは『はじめて』のことですよ——しかし、私は時給八百五十円ですが、なにか？」

道、アボジーとペリジーで話していたの——が、労働のあとの靴下のよくな夜に、ツグミのように素敵な声が聞こえるとは思つていませんでした。

「しかし、そんなことはたいした問題ではありません。私と一緒に踊りませんか……私は、実は踊りが得意なのです」見ると、美しい満月が左右にステップカールをしているではないですか!! 絶景なるハムストリングス!! 日常に月は、こんな動きをしているのですよ。美しいステップカールを、あなたは月を見たことがありますか？ あなたは海を見たことがあるか？」

僕もロゼットも驚嘆のまなざしで見上げます。だつて、あまりに美しい動きだ。それはプリンの底のほうのカラメルの奥に秘められている、あなたが僕に掛けた魔法に似ている。僕は、手を伸ばして、届かなくて、少しだけ泣いた。

「私を飲みに誘うのは、杜甫だか李白だか、とにかく中国の詩人以来でしょう。杯を挙げましょう。さあ、心いくまで楽しみましょう。人生は、ハムストリングスなのです!!」

沢庵のような黄色い夜でしたので、宇宙のことを精円軌

「つまりそれは、永遠の六ペソスなのです。パチパチ」「ああ、分かります。しかし、私は時給千百円です……交通費込みで……生活は、カツカツコツコツ、ジタジタ」

ロゼットの目は、ひどく悲しそうでした。だし巻き玉子がその目にかかるて、うつとおしく、ひどく氣にしているようでもありました。ちょうどその時、駆前のゴミ箱のほとりを、サッカーボールほどもあるネズミが走っていたのだ。

僕は、それを知つていたが、誰にも言わなかつた。

「つまりそれは、永遠の六ペソスなのですか？」

干す——僕たちは、友達だ。もちろん、セニヨーラ・グレゴリオがカウンターの向こう側で、娘時代の思い出に美しい泡たたいたメスカル酒を飲んでいます——人生は変わるよ、思いも飲まないほうにね。

派遣会社からの契約書をくるくるとまるめゴミ箱に放つて、薄切りにしたライムを一口かじった僕は、思い切った告白をする予定なのだ。

「実は僕は、『保存の神』なのです。インドでいう『ヴィシヌ』にあたる形而上のコンセプトにおいて、とても大事な神だつたのです。僕は、多分、世界を保存、緩やかな保存、つまり発酵であつたりする、のだが、緩やかに形を変えながら生きて来たのです!!」

すると、ロゼットはパクチーになつていました。

「あれ、実は告白しちゃいますと、私は『破壊の神』なのです。インドでいう『シヴァ』にあたりますね、まるまるね。いつちや悪いけれど、あなたよりも格段に人気があります。だつて『破壊』ですからね。それは、こんなに楽しいことはないことを保証しているのです——くだらない映画でよくあります——私がやつたこと、やつて来たこととすつかり同じことなんですよ!!」

ちに悟ったのです。雷鳴轟く啓示を受けた詩人だ。  
「僕も五十二万と一才になります」

空を覆う、まことに大きな樹。全ての命が宿る「命の木」、無数の星が降る夜でした。駅前の繁華街でゴミをあさつていたフットボール大のネズミ軍団は、今、LOVE 胡椒たる福島に移動をして、何かをあさつているぞ——

にしても……「神戸祭り」で変態カメラマンにすらなれない、哀れなハンバート・ハンバートよ!!

ほぞーんぞーん、ぞぞーん。

僕たちは、山だ、海だ。  
そして未来で、ノートブックのフェイスブックは、百均だ。

ペンシルベニアはペンシルで、つまり僕は君みたいだ。  
ほぞーんぞーん、ぞぞーん。

世界の唄は、どんな形だ？ と歌っている三人は肩を組んで海まで歩きました。奮発した月は、芋虫入りメスカル

——いつの間にか衣装を着替えて、ベリーダンサーとなつた月が口を挟みます。

「そういうのつて必要ですよね。でも、びっくりました、というほどびっくりはましませんでした。私は『創造の神』なのです。お分かりでしょう？ 『グラフマー』にあたります。足りり、そこは鋭意検討中のですが……」

アラカシのドングリが落ちるときに、ちょうど「ぴょろぴょろ」という音をたてるでしょうか？ それに似たような感動が押し寄せて来ました。

「ちなみにあなたはお幾つで？」

「五十二万と一才になります」とパクチー。

ジキルとハイドは、こうして一緒に酒を飲んだだろうと思ふし、真実を探し続けた上官魯氏はこんな夜を過ごしたのではないかと思つたけれど、長い沈黙のあとのように、うそっぽちの沈黙ではない、それは、深くてあまりに見通せなくて、宇宙卵のような、しかし昔ひとりの音楽家がいたというのと同じくらいの確かな確証を持つて、一瞬のう

酒の瓶を五本も買ったので、みんなで回し飲みをしながら踊りまくっています——私たちは、どこにすましていたにしても、きっと同じでまつたく違う——いつたい月は何をひつてひるのだ？

夏の花が咲いています。真っ白な Lily。A lullaby of lyrics of Lily。真っ白な真っ白な百合の花を髪に飾つたロゼットの、ああ、なんて美しいこと!! 僕たちは肩を組んで海まで歩いたのだった。あの日、ジンバブエでみたデモ隊、あの日、ビラヴドと共に歌つた大地の震え、あの日の朝、あなたの流れるような髪、コーヒーを飲む指先、積極的に僕の隣の席に移る、温み、ふくらみ。踊つて飛んで舞つて弾けて転げて歌つて歌つたのだ。そして、この人物を紹介しよう!! ブリキの太鼓でマーチを刻むのは、我らのオスカル・マツエラート!!

黄色い、胡麻みたいな夜だったのです。歌いながらマーチをする僕たちのあとを、沢山のものが着いて来ます。ドングリ、スマレ、星、百足、コオロギ、ライオン、虎、象、羊、海月、ヒノキ、フラミンゴ、シリアル難民、七味唐辛子、マイケル、雨、夢、薬と日々の生活、チーズは薫製のほうがいい、鯨、マヨネーズ、サイゼリア、サイゼリアで勤める足のやたらと

速い従業員、ベイコンの三連幅、ゴジラ、ホタルイカ、シロツメグサ、豚、豚の足、豚の耳、海猫山猫、ラジオ英会話、その他、スナップエンドウ、箸、情緒、セックス、甘いもの、ぬるま湯、思い出、勇気、愛情、パンツ……白いパンツは、ダイオウイカみたいだ。君のパンツは、ダイオウイカみたいだ。それは真実の気球、希求であり、つまり愛を語れない、目をまっすぐに見つめることのできない、僕のダイオウイカだ。ダイオウイカだった頃の記憶、深海みたいな、風船みたいな、すべてのもの、の、すべてのものが僕たちの後を着いて来る……

ぞーんぞーん、ほぞぞーん。

丘だ、谷だ。

過去で、原子力で、アルコホールだ。

百シーベルトの夢は、想像可能で、つまり僕は君みたいだぞぞーん。

海、たどり着く。海水パンツは、無味無臭の少年にピッタリでした。瀬戸内海のような海。だけど、それはEのようないい海でE=海のようないい夏休み、海へ遊びに行つた、父も僕も兄も（政治家になつた）弟も（どこかの行つた）をしたサメの恋。

ひぞーんひほーぞ、ほーん。  
なにも見えない夜は、カテーテルみたいだ。  
黄色いレシピは、なにも見えなくて相対性だ。  
相対性によりかかつた、僕たちは時間と運命と、猫の目をしたサメの恋。

唄はいくらでも出来る。が、世界には限界がある。僕たちの輪は今、すつかり太平洋を囲つていい。すべてのものが手をつないでいるのだ。僕とロゼットと月（若干の竜舌蘭酒と）から始まつた輪は、今やすつかり環大西洋になつた。その海岸にいるのは、かのやんごとなき騎士であられるドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ様!! バルセロナの海、果てしない潮騒と荒波に対峙、想い姫を讃えた自作の詩を朗唱していらっしゃる。その筏に乗つているのは、ハックルベリー・フィンとジムでしょう!! 僕は、地獄に行くことが出来る? ほんと? ほんとに??

イカ釣り漁船がぽんぽんぽんぽん、カジキマグロを相手にライオンの夢を語つているのはサンチャゴ老人。星は、量子論的にもずっと友達だ。無人島、野生動物の毛皮で作つた服を着て、巨大な葉っぱの傘を差し、亀の肉を串刺しに

今日、カップヌードルはもう不要ない。芸術家である母の主張は正しかつた。そして、ちょっととの悪を持ち込んだ父も正しかつた。二人とも正義の人であつたし、優しい人であつた。そして、僕は、今、「保存の神」として、こうしてすべてのものと手をつないで海にいる。

ふぞーんぞーほ、ぞーん。

Q!! あの美しい朝、シリアルの海で見つかった男の子。イラクで空爆にあつている女の子。ベトナムの裸の少女。蝶と鰯。バタバタ世界を覆うドクドク、皮膚のだらりと垂れた、今も宇宙を進む二つの光、水が欲しい、水が欲しい、被爆者、みんな——みんな、こつちへ来て、竜舌蘭酒を一緒に飲もうよ!!

ここかすごく遠い所で、原子力発電所が爆発した気がしましたが、きっと氣のせいでしょう。それがまるまると太つたネズミのせいであつたにしても、ネズミが配管をかじつてね——そんなものは幻だ。

会社の主任らしい）まだまだ若かつた。まだ背筋のしゃんとしていた父は、誇らしげに四杯のカップヌードルを持つて来た……輝くような大腿筋だ、毛がもじやもじやと生えたプロレタリアート的筋肉……「海の家」で買つてきたのだろう。まだ背筋のしゃんとしていた母は、カップヌードルなど食べるなどを許さなかつた——骨を溶かすもんだと、主張していた——僕たちは、まだ何も知らなかつた、知らないでも許されていた緑のウキキキのような僕は、そのカップヌードルを（プラスチックのスプーンで）食べた。美味しいかつたなあ……天使の味だった。海の味だった。乳房だと思つた……空が拓けて、なんというか、百万ドル札がキラキラ降つて来て……運動神経抜群、炭水化物を全て代謝できる少年は、両手をあげた歓喜のなかですべてを吸収した。

かないと……四回転サルコウを鮮やかに決めながら月。

インド洋の海はどんぶらつっこつこ、確かにここに塙を取りに来たことが、あつた!! 世界の海は繫がっているのだ。そう、近づこう、そうだよ。歌いながら、踊りながら、中心に向かおう!!

臨時ニュースは伝わらなかつたけれど、多分どこか、ニューヨークだか、ロンドンだか、パリだか、東京だか、神戸だか、遠い昔に聞いたことのある都市が原子爆弾でやられたつてさ。風は友達だから、人間が焼ける匂いを僕に届けることはないけれど……ポンキートンク、ひとり飲む、ジエフリー・ファーミンのように孤独な都市なんて、アシッド豆乳のように酸っぱい……つまりみんな爆発した。結局、人間は、人間の持つている知とウキキキをうまく使えなかつたんだねえ……知つてたのにねえ。貯金? 保険? 部長? 課長? 経済? 学問? 云々? 馬鹿だね……ばかんと一発。あつと言う間。これでは、駄目だよ——そんなものは幻だよ。

じやぱじやぱ、どひよどびゅ、生ビールの泡のように気

こそ、あの芳香の中へ飛び込もう!!

バナナみたいな夜でした。

ゆつくりゆつくりと、僕たちは吸い込まれます。全てがお尻の穴に吸い込まれます。中に入るのはたまらなく気持ちがいい。出すのと同じように、いい。僕は、今、なんとかの永遠と一体化しようとしている——ぬめめめとした、永遠の芳香の中へ、飛び込もう。僕の呼びかけに応じた全てのもの、が、吸い込まれて行く。海も山も大地も、あるいは原子力も、僕はもうそんな言葉を忘れてしまった。色も忘れてしまつたし、名前も形も忘れてしまつたけれど、僕は「保存の神」であるし、あるいは「創造」もしたし「破壊」もしたし、ありとあらゆる神だつたけれど、今、ひとつ所に、いる。永遠の芳香、むせるようなお尻の穴に、吸い込まれ、凝縮している。あぶく、しづく、分子、原子、量子よりもずっと小さい。こんなだ!! でも大きい。息をつま先まで吸い込んで……キミノ胸にダイブするくらい、こんなに大きい……

永遠だ、光り凍る。

ほぞーんぞぞーん、ぞぞーん。  
ぞぞーん、ぞ、

遠い所から聞こえるのは、唄?

——人生は変わるよ、思いも飲まないほうにね。

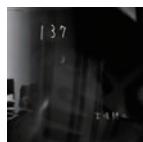
E II、

きゅつ。

持ちよくはしゃぎまくつて中心に集まつた僕たちの頭上に、大きな月が輝いていました——月は僕たちと一緒にエンカを踊っているのではないか? いえいえ、あなたは大きな間違いをしている。月はひとつではないのです……その証拠に、世界各国、砂漠であつても、シエラ・モレードのような街でも、瘡蓋のような田舎でも、神話の森でも、どこにいたつて月に会うことができるでしょう? ——月は、まるで大きなお尻のようでした。まんまるとしていて、林檎のようにキラキラつややか、そして、薔薇の芳香……桃、白檀、あるいは歌のお姉さんのように世界についてとてつもなく前向きな、芳香を放っています——ヘラのお尻のようです。僕たちは、きっとそこから生まれて来たのだ。少なくとも……ヨガパンツを履いたように——コンヤ、キミー、——僕は。それは、ツルツルとして手が届かず、手が届いていても永遠に手が届きそうにない、困った、困つたことに届したとしても構わないけれど、これは、困つた。

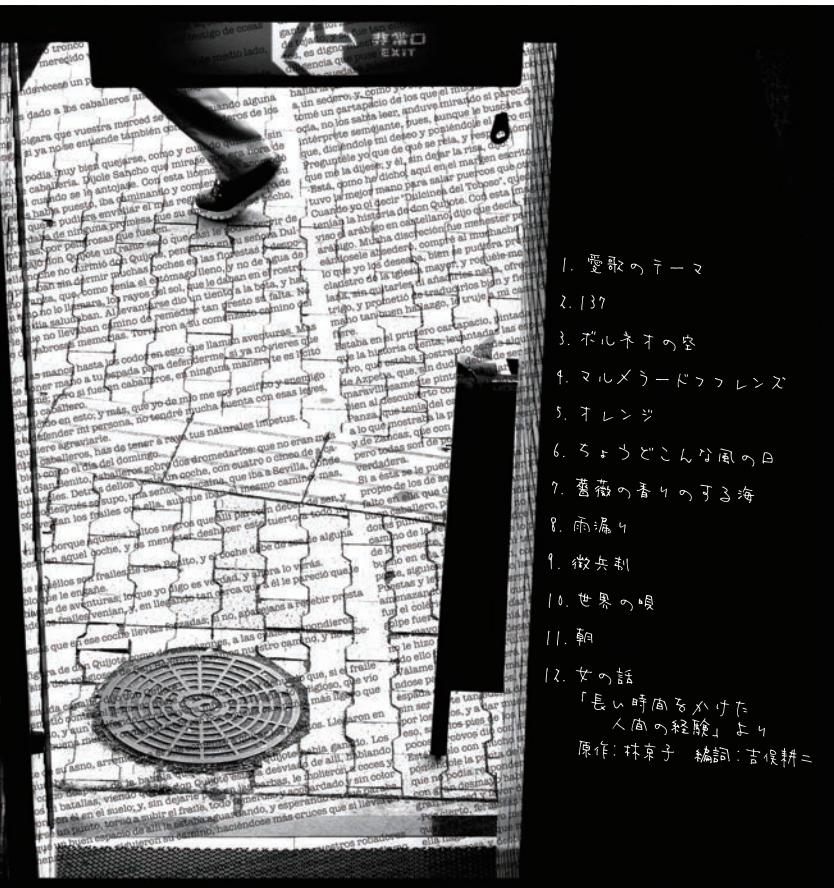
137

林京子原作「女の話～長い時間をかけた人間の経験」を含む12の物語。神戸のシャンソン・リアリスト吉俣耕二が、愛馬ロシナンテならぬ愛ギターYUKIEと共に描き出す、世界のかたち。



¥1,080

MUSIC STUDIO 海猫山猫  
ウェブサイトで販売中!  
<http://umiyanekoto.thebase.in>



1. 女の話のテーマ
  2. 137
  3. ボルネオの空
  4. マルメうーだッフレンズ
  5. オレンジ
  6. ちょうどこんな風の日
  7. 薔薇の香りのする海
  8. 雨漏り
  9. 微兵刑
  10. 世界の娘
  11. 朝
  12. 女の話  
「長い時間をかけた  
人間の経験」より
- 原作: 林京子 編訳: 吉俣耕二

など聴いても飽きない節回し。軽快なリズム。ほのぼのとした雰囲気とハッとさせられる展開。染み入るやるせなさ。「137」に塗れた世の中の音色なのかも知れない。

絶品は故・林京子の作品の一部を歌詞化した弾き語りである「女の話」。毎回、初めて「ヒバク体験」を聞かされたような思いになる。

—ノーマ・フィールド氏（シカゴ大学名誉教授）

E= booklet

著者 吉俣耕二

イラスト・デザイン Aya Nishimura

発行 2017年3月25日

発行元 MUSIC STUDIO 海猫山猫

〒650-0012

兵庫県神戸市中央区北長狭通4丁目4-14

E= performance

starring: 吉俣耕二 & YUKIE

my champion: Aya Nishimura

thanks: 二ノ宮修生 & 一本どっこ

ミナトノヨーコ

木村佐和子

ヒラタユウイチ

ナカノサヤカ